

バルトンと横浜

高い席から恐縮でございます。さらに座ってやらせていただきます。今、ご紹介いただきました堀でございます。私は直接この会の会員ではないんですが、会との関係は多少ございまして、そのあたりもちょっとご説明させていただければと思っています。実は私、先ほどご紹介いただきましたように、昭和五六年に東京大学の大学院の方から横浜開港資料館に就職致しました。これは横浜市役所の施設でございます。

横浜開港資料館というのは何をするところかというと、横浜の歴史、特に開港以降の歴史について関連する資料を集め保存、公開するというような施設でございます。そこに来たものですから、横浜のこ

とをいろいろ調べるということになったわけですが。

私は出身は建築科なものですから、もちろん建築物を調べることはそれなりにいろいろあります。特に開港場といいますが、外国人居留地があったものですから、西洋の技術を再現した建物がいっぱい建っていたところでありますので、それを対象とした研究というのはたくさんあるわけですけれども、どうも建築ばかりもやっておられません。建築物というのは、上の方に建てて見えてくるわけですから、それを成立せしめるような都市全体を、都市のハードの面の歴史みたいなものと一緒に調べてみたいと考えました。建築ばかりではなく、都市土木という概念があるかわかりませんが、そのようなこと

堀

勇良 たけよし



も含めて研究してみたいと思うようになりました。

昨年の樋口次郎さんの講演の中にもありましたけれども、先ず研究会を持って勉強してみようというようなところまでは行っただんですが、はて、具体的にやるとご相談する先生が先ずいるかというような問題がでて参りました。とりわけ下水というのはそれまで見たことがなく、実は私が開港資料館に来たときに目の当たりにしたわけです。

開港資料館というのは横浜でいいますと、神奈川県庁の真ん前にありまして、ちょうど神奈川県庁と私どものところの間が昔の外国人居留地と日本人街の境にあたるところでございます。その開港資料館の新しく建った建物の地下に居留地時代とその当時言われていたんですが、下水管が壁面にはめ込まれていまして、レンガ造の卵形管でございますけれども、そういうのを直に目にしたわけでございます。こういうものがいつそこに設置されて、どうい

人が計画したのか、こういうところからいろいろ研究してみようというようなことでやっていたわけで

す。ちょうどたまたまその時期に、この研究会の初期のメンバーにも入っておられたかと思えますけれども、横浜市で下水道史の編纂というのを手がけておられ、もと朝日新聞の記者で、その当時は横浜下水道局の嘱託だったんですけれども、早稲田稔さんという方がそのあたりのことを一生懸命調べておられました。その人にまず最初に聞きに行きましたら、いろいろな話題が出て参りました。

一つは居留地時代のレンガ造の下水管の計画者がまだわからないということでした。年代はおよそ明治一四年ぐらいから計画にかかったというようなことは、すでに早稲田さんが突き止めておられました。このとき誰がやったかというようにことが課題としてあると思いました。これをまず突き止めてみようということ、そのときに同時に下水道史というのはなかなかやられていないことが判りました。横浜の下水道のことはほかのいろいろな本、例えば中島鋭治さんの「日本水道史」に下水道のことも書いてあるんですが、そこに横浜のことは何もふれていな

いというようなこともございます。

ただ、これを読みなさいといって、そのときに早稲田さんから手渡されたといえますか、もらってしまったんですが、それが稲場さんの「下水道論の歴史的探訪」という本でありました。それを読みまして、これは稲場さんから直接お話を聞こうということで、当時確か日本下水道事業団研修部にいらっしゃったかと思えますけれども、わざわざ横浜に来ていただきましてお話をうかがったという記憶がございます。

それ以来、稲場さんとはよくよくご連絡させていただきました。また同時に日本下水道協会さんの方では「日本下水道史」の編纂を始めていたところかと思えます。そのときに同協会の照井さんにもいろいろなことを教わりました。そんなことで、下水文化研究会の話は早稲田さんや、照井さん、あるいは稲場さんを通して、ちよくちよく聞いておりますし、また、「下水文化研究」をいただいたり、会員でもないんですが、鳥海さんの遺稿集もいただい

おります。

そういう関係がありまして、先般、照井さんを通して、稲場さんからも言われたんですが、何かバルトン忌で話せというようなことで、とっさに「バルトンと横浜」というタイトルを思いついたんです。

しかし実はバルトンはほとんど横浜とは関係ありません。逆に言うと、関係ないことは、何かバルトンの位置みたいなことを逆に意味付けるといいますか、お話しすることができるんじゃないかというように思いまして、そんな語意のタイトルを付けさせていただきました。

それとは別に、私にとってバルトンというのは、バルトンさんの名前は大学院時代から耳にしておりました。遺稿集の中にも書いてありますが、鳥海さんがテレビに出られたときの様子を、私、よく知っております。私は村松貞次郎先生（本の中では松村になっていますが、村松が正しい。）の大学院の研究室におりまして、確かテレビに出るときに、村松先生は「日本水道史」の記述についてのお話をさ

れたのだと思いますけれども、バルトンさんが一般的には台湾で亡くなったということが言われておりまして、このテレビに出た結果、バルトンさんは日本で亡くなって青山に眠っておられることが判りました。

青山というのは村松先生がいらっしゃったところでした、そこは東京大学といっても生産技術研究所というところですよ。それが六本木にございまして、裏がすぐ青山墓地でございました。つまりすぐ近くにバルトンさんのお墓があるというような不思議な縁がございます。

それからまた、私は建築の方の者ですから、建築の資料はいろいろ見ておりまして、その中で、これは稲場さんのご本にも出てくるんですが、バルトンさんの講義風景の話というのがあります。建築学会の方で昭和七、八年ごろに明治建築座談会という回顧座談会があり、浅草の一二階の話の関連の中でバルトンさんの講義風景というのが出て参ります。明治二六年に東京大学の建築学科（当時は造家学科）

を卒業された方が四名ほどおられるのですが、その方が、土木工学科へ行って授業を受けておられたのでしょうか、四名のうち一人が欠席すると二五％欠席なので授業とりやめというような話です。これは明治建築座談会という中に載っております、そういうことで、バルトンさんの名前は何となく印象に残っているといえますか、前からかなり親しい印象を持っております。

この辺は前置きでございますが、いよいよ「バルトンと横浜」ということを話さなければなりません。直接本題に入りますが、先ほど言いましたように、普通のお雇い外国人ということでは、明治初期の人はとりわけ技術者に関して言えば何らかの形で横浜と関係を持っている方が非常に多いわけです。逆に関係を持たないというようなことはそれなりの意味があるのではないかと思います。

一つは、前回のパーマーさんの話にも関係するんですが、バルトンさんが来日した時点で横浜に関する衛生工事、具体的には水道と下水、この整備と

いうのは一通り終わっていたということがございます。逆に言いますと、バルトンさんが横浜に出てくる出番はなかったというようなことが一つ、直接的な関係としてあるかと思えます。

先ほどもお話ししましたように、横浜の、とりわけ外国人居留地と関係するところの下水道というのは明治一四年から二〇年にかけて、いわゆるレンガ造で整備されておりました。これは実は日本人が設計計画した最初のものですけれども、それともう一つ水道の方は前回も出ましたパーマーさんが指揮して、これも明治一八年に着工して二〇年の、バルトンさんが来日したのは五月の下旬でございますが、一〇月に通水を開始しておりますので、ほとんど工事が終わっていた段階であろうかと思えます。それが直接、横浜とは関係なかったということになろうかと思えます。

もう一つは、明治二〇年代、一八八〇年代の終わりあたりの、この時期のお雇い外国人というのはどういう位置になるんだろうかというのが気になって

おります。というのは、明治初期のお雇い外国人というのは鉄道でも、あるいは灯台技術者のプラントンさんでもいいんですが、何から何までやるというような時代があるわけです。その大筋を言いますと、明治一〇年ごろを境にして、だんだん日本人が取って代わるようになります。しかも、日本人の方はそれなりの教育体系を整えてきますから、例えば明治一年、東京大学の理学部の土木工学科から三名の卒業者が出ます。あるいは翌年に工部大学校の土木工学科から卒業者を出して、それなりにお雇い外国人に取って代わる体制ができてつづけるわけです。そういう時代の中で明治一九年から二〇年、このときは学校の方も工部大学校から帝国大学工科大学になるというような教育の制度までがある意味で体系化されるという時期であります。政治の方では明治一八年末に内閣制度ができるということで、明治二三年の大日本帝国憲法の発布、あるいは帝国議会の開設というようなところに向けていろいろな諸制度が整備されて、ある意味では日本の近代化とい

ますか、そういうところが自立しかけたときでございます。

そういうときにお雇い外国人というのはどういう位置にあったのでしょうか。そういう中の一人としてバルトンさんがいるということになるわけなんです。このバルトンさんの位置付けを考えると、やはりパーマーさんと比較して考えると非常にわかりやすいんじゃないかということがございます。

パーマーさんはバルトンさんより、お雇い外国人になるのは少し早いわけですが、全体から見れば、やはり遅れて来たお雇い外国人という形になろうかと思えます。ところがパーマーさんの立場というのは実はお雇い外国人の中では極めて異例な扱いだったのではないかというように気がしております。

ということとは、どういうことかといいますと、これも当時、内務省にいたオランダ人のお雇い技術者たちとの比較を見ればわかりやすいのですが、パーマーさんは工事の設計から監督までやるという体制で横浜の水道をやるわけです。通常、明治初期とか

は除いて、内務省土木局のお雇いオランダ人技術者が明治一〇年代以降に実際の工事の現場の監督、現場の指揮をするということはほとんどあり得ないというよりも、はっきりいってないという時代にパーマーさんがそういう監督までやるということとはそれなりの理由がなければならぬというように思っています。計画だけということであれば納得できるのですが、パーマーさんの場合は異例のケースということができます。

このようなことから整理して行きますと、ある意味で、遅れてきたお雇い外国人のパターンといえますか、雇われ方といえますか、立場に恐らく三つぐらいあるんじゃないかと思っています。一つはちょうどバルトンさんが来日した一年前ぐらいに建築の方では、これもちょっと異質なお雇い外国人として、エンデ&ベックマンというドイツ人の建築家がおります。これは官庁集中計画という、現在は霞が関に法務省の庁舎が残っているわけですから、あの辺に国会議事堂を含めた日本の官庁街をつくるとい

うようなことでお雇いになった方でございます。こういうような一種の政治的ないろいろな事情、条約改正も含めて、そのような事情から雇われるという、あまり前後の脈絡なく、突如雇われるというパターンが一つあるかと思えます。

衛生工事の方から言えば、エンデ&ベックマンと関係して、明治二〇年、ちょうどバルトンさんが来日する二、三か月前だと思えますけれども、ベルリンの水道とかモスクワの水道を手がけたホーブレヒトというかなり大物の人らしいんですが、この方が来日して、官庁集中計画に関係し、衛生工事的な側面の意見を述べるというようなことがあります。まさしくこういう人たちは一種の政治的な要請の中でお雇い外国人になるというようなことであつたらうかと思えます。

もう一つは、恐らくバルトンさんがあたるかと思いますが、ある特殊技術、特殊分野の中で専門的な分野をカバーするためのお雇い外国人という立場です。まさにバルトンさんは衛生工学を帝国大学の工

科大学で教えるというある意味で限定された領域の中でお雇いになったということがあろうかと思いません。

例えば、鉄道なんかでいいますと、一般的な仕事はほとんど日本人が取って代わった時期なんです、ただ鉄道の橋梁部門だけはお雇い外国人がずっと残ります。これもある種の特異な分野といえますか、特定の分野でお雇いになっています。例えば最後の鉄道技師長になりますポールネルさんという方がおられるのですが、この方は鉄道の橋梁を設計するため最後まで残ったお雇い外国人です。それに比較的近い立場でバルトンさんは来日しています。

更にもう一つは、情勢は変わってしまっていて、しかしいろいろな手続き上というところかと思いますが、そういう関係で残ってしまったお雇い外国人がいるのではないかと思います。例えば内務省の、先ほど出ましたお雇い外国人であるデレーケさんという方は明治二〇年代の終わりくらいまで内務省土木局のお雇い外国人として残るんですが、恐らくこの二〇

年代ぐらいになると実質的に技術的な面でお雇い外国人として存続する意味があったのかなと思っております。こういうと怒られるんですが、あるいはいろいろな手続きなどをする関係上、多少外国人の意見を聞くような形にしておいた方がいろいろな事業がやりやすいというような政策的な裏があって残ってしまったお雇い外国人じゃないかと思われれます。これは言いすぎかもしれませんが、そのようなこともあったのではないかと思うわけです。

そのようなことから、ある局部的な政治的な背景の中でお雇いになっていく人。それから、ある特殊分野を専門的に請け負う形のお雇い外国人。それと政策的に残しておいた方がいだろうというような形で残っている外国人。こんな三種類ぐらいのパターンが考えられると思います。

そのうちのバルトンさんの来日するきっかけは、本務としては、衛生工学という特殊な領域を教えるための先生として来日したということが言えるのではないかと思います。ただ、もう少し遅く来日して

いれば、それだけで済んでいて、比較的安定したといえますか、あまりいろいろな仕事に忙殺されないで終わっただけでしょうけれども、先ほど言いましたように、ちょうど日本が近代化に移行しかけた時期でございますので、いろいろな側面を負わされたところは否定できないかと思えます。

そのバルトンさんがお雇い外国人として具体的にどういう立場があったかという点、恐らく三つぐらいあったのではないかと思います。一つは本務ですが、帝国大学の土木工学科で衛生工学を教えるという教育面でございます。これは内容的にははっきりしているわけでして、具体的に何を教えたかという点、よくわかりませんが、卒業生の中で講義ノートを残していればわかることだと思えますけれども、教師としての一面がございます。

もう一つは、これもよく言われますが、内務省衛生局の、正確に言うとなんかという点で難しいところなんです、大あわてで昨日、どういう形で内務省のお雇いになっているかというのを内務省の年

報の明治二十一年功程報告を見てみました。そうしましたら、衛生局の衛生事務の欄に衛生工事という項目がございます。「近世、衛生工事の業大に必要を生じ、水道起功のごとき下水改造の挙のごとき、その事業ようやく、まさに各地に起らんとするの傾向をあらわし、とりわけ東京市区改正のごときは、」という文がございます。これら調査、計画をなし、これか監督をなすは衛生局最重の要務にして、今日は特にその緊急を感じるの時なるをもって、帝国大学雇い衛生工学専門教師、英国人ウイリアム・キニモンド・バルトン兼雇いすることに決し、明治二十一年一月二十四日をもって同氏に囑託し。」ということでございますので、本務は帝国大学の教師で、内務省衛生局の雇いを兼務するということになるだろうと思えます。

しかし、そのあとにもう一条ございまして、「明治二十二年一月一日より、来たる二十三年五月二十五日まで、」この日付が一年と五か月分ぐらいありまして、この日付はどういう意味を持っているのかよ

くわかりませんが、明治二二年一月一日より来たる二三年五月二五日まで、内務省衛生工事の顧問技師を兼ねます。内務省衛生工事の顧問技師を兼ねるということと、前に出てくる兼雇いとはどういう関係にあるのかよくわかりませんが、「年俸五〇〇円を支給し」ということは、東京帝国大学の給料とは別口であるということになるのだろうかと思えます。

「年俸五〇〇円を支給し、職務上、尋常の事項は衛生局長の指揮を受けしめたい」ということです。これは明らかに衛生局の雇いになるわけでございます。

ついでに言いますと、「本件に要する費用は、一人バルトンの年俸旅費にとどまらず、これを補助すべき技術官及び他の雑費等を合計するときは、三一六〇円余の概算となる。」これは流用して充てるということまで書いてあります。つまりバルトンが兼雇いとして内務省衛生局の顧問技師をしているわけですが、その下にもう一人、技術官がいたということになるわけです。

この技術官が誰かというようなことも調べておきたいという気が致します。国の職員録を見ますと、明治二一年一月一〇日現在の職員録というのは、内閣が発足した一番最初の職員録の方だと思いますが、その衛生局のところに技師試験として、小林柏次郎さんという方がおられます。ですから、内務省年報に出てくるバルトンを補助すべき技術官というのは小林柏次郎さんということになるかと思えます。この柏次郎さんは職員録でいいますと、二一年から二三年一月一〇日現在の職員録まで技師試験として出てきます。ですから、バルトンさんの下でいろいろな技術的な検討といえますが、いろいろな調査などを遂行したのは小林柏次郎さんだと思います。ハクジロウのハクは木へんに白、柏という字です。

この方は中島鋭治さんの「日本水道史」の水道関係技術者という経歴のところにも出てくる人でございます。簡単に言いますと小林柏次郎さんは、明治一九年に帝国大学工科大学の土木工学科を卒業され

て、一時埼玉県に勤め、その後、アメリカに留学して明治二一年に日本に帰ってこられました。明治二三年に東京市の水道技師になって、東京市の創設水道、とりわけ淀橋浄水場の工事の面倒を見られました。東京の工事が終わったあと、東京電灯会社の技師長になって、明治四一年に亡くなっておられます。

比較的早く亡くなられたわけですが、不思議なことには「日本水道史」の記述、小林さんの履歴の中には内務省の衛生局の技師試験になったことは一切触れていません。どういう経緯かわかりませんが、そういうことでバルトンさんの側から触れられることがない方ですし、もちろん「日本水道史」の方からもバルトンさんとの関係が語られなかった人です。私も具体的にどういう方が存じませんが、バルトンさんのことを研究する場合に、多少何かヒントになるような方ではないかということでご紹介させていただいた次第です。

話は本題からそれましたが、実はバルトンさんはもう一つ、この時期に大きな仕事をしておられます。

これはどういう資格なのかわかりませんが、内容はよくわかっていてございませう。当時、東京市区改正委員会が下水道の肩書きは、調査員の主査だったであろうか、それをやっているわけでございませうけれども、それが内務省衛生局の顧問技師とどういう関係にあったのかというところは、確認してくるのを忘れました。ただ、この資格がどういふことかということは、バルトンさんの立場の中にあつては非常に重要なことではないかというように思っております。

話はかわりますが、いつも気になっていることがあります。それはやはりお雇い外国人神話みたいなものがございまして、先ほど言いました横浜のレンガ造の下水道も最初のうちは、外国人が計画したものに違いないだろうと思っております。明治の一〇年代にこういうレンガ造の近代的な下水道を造ったのは、はなから日本人じゃないだろうというような印象を、私も最初持ちました。つまり、これはお雇い外国人の計画に違いないと思ったわけです。

ると、明治十四年ごろにいたお雇い外国人で土木のことができるのはということになると、単純にも当時、一四年ですと、ファン・ドールンがいたかもしれませんが、ファン・ドールンか、ムルドルかデレールかという話になってくるわけです。

ところが実際、いろいろ調べた結果、神奈川県、居留地の下水道というのは、その当時、神奈川県御用係をやっていた三田善太郎という人が計画したということ。早稲田さんが調べたり、私もいろいろ調べた結果わかってきたわけでございます。

そういうことを考えてみますと、例えば東京市の神田下水というのも、一般的にはデレーケの設計であると言われていたわけですが、これも、私が実際に調べたわけではないんですけれども、横浜との関連でいいますと、最初の計画というのは恐らく東京府でやっているのではないかという気がします。つまり内務省から補助金をもらうわけですから、申請を受けた内務省では仕事をこう変えた方がいいんじゃないかという、いわゆる監査といいますか、査定

というんでしょうか、そういうものがお雇い外国人の役割になるのだと思います。恐らくその手前のところで基本的な計画というのはどうも日本人がやっているんじゃないかという気がします。

そういうところも含めて、お雇い外国人の立場と意味みたいなものをもう少し検討し直した上で、せっかく有名な方が設計したということになっているんだから、うるさいことを言うなと怒られるんですが、もう一つ、相対化した中で、お雇い外国人の位置付けというのを再評価した方がいいのではないかということが今、思っている感想でございます。まとまらない話なんです、あと、今後のバルトン研究みたいな話の思いつきでございますが、いくつか述べさせていただきたいと思います。

一つはある意味でバルトンさんのことを、今、日本の中でいろいろ調べるというようなことは、いろいろまだ新しい事実が出てくるかと思いますが、七八割方、限界かなという感じもしております。そういう意味からいいますと、一つは稲場さんもぜひや

りたいと言っておられますが、来日するまでのことというのは恐らくイギリスあたりに行つて丹念に調べていけばかなりの成果が上がるのではないかと思います。

それから、日本に来たあと、鳥海さんの遺稿集に絡めていいますと、こんなことがわかつてどうなるというものでもないんですが、例えば、バルトンさんがどこに住んでいたかというこの話がいくつか遺稿集の中には出て参ります。この会場の極く近くでございますけれども、加賀屋敷に十数棟のお雇い外国人の官舎があつて、バルトンさんはその中の一棟に住んでいたようでありますが、残念ながら、この官舎に住んでいたかはわからないと書いてあります。何か調べようがないかというようなことをちよつと思ひまして、開港資料館に來られて、いろいろ調べる方がよく使われる資料に当たってみました。それはジャパンディレクトリーといひまして、毎年、横浜の新聞社が外国人の住所録を出してあります。これは幕末から震災まで、あるいは今は出版社

が違ひますけれども、現在でも出ているはずでございまして、ジャパンタイムス社が出しているんだと思ひますけれども、そういう外国人の住所録がございまして。それを急遽調べて参りましたら、ここにジャパンディレクトリのお尻のところに、索引でございまして、そこにバルトンさんが出てきまして、一番最初に出てくる年月は見てこなかったんですが、一八九四年、明治二十七年版、一八九三年年末の情報ですが、これが永田町に移る前の住所になつておりまして、住所は加賀屋敷の九というようになってい

す。

ですから、鳥海さんの遺稿集の中では外国人教師館が一七棟あつて、一番がフェノロサで、ベルツさんが一二番というようなことが書いてあります。その番号でいひますと、バルトンさんは九番館に永田町に移るまでは住んでいたということになります。

九番館がどこかというのを調べようとしたが、残念ながらわかりませんでした。次の図は午前中に

中國大學略圖

比例尺一千四百分之二

地片 九萬九千九百七十九坪六分

地片 壹萬壹千六百六十六坪

水田 壹萬二千七百九十九坪

上地 壹萬二千七百九十九坪

新化地 二萬六千六百六十六坪

地片 壹萬一千六百六十六坪



大あわてで東大総合図書館に行って帝国大学一覧を見せただいて、その付図に帝国大学の構内図が載っておりまして、それをコピーしたものです。教師館の一七棟はもうないんですが、明治二四、五年の版でございまして、これが赤門ですので、この学士会館分館はこの当りになります。それで、三か所教師館がございまして、一つは龍岡門のところですが、病院側の上に四棟ばかりございます。これは医学部の先生方の教師館かなという感じがしますが、ここに一つあります。それから、上野寄りのところ、今は何門と言っているんでしょうか、そこに三棟ばかりございます。それから一番この辺に可能性があると思うんですが、今の工学部の土木と建築のある一号館の脇、今、都市工の建物が建っているところですか、一つは仮本部になっていますが四棟ばかりございます。

一七棟はもうなくて、鳥海さんが、確かベルツさんの会話を引用されているんだと思いますけれども、白いところは恐らく建てかわったところだと思います。

す。ここに八棟ばかりあって、これを合わせると一七に近いかなと思うんですが、こういう順番が付いていたかはわかりません。番号が書いてある地図があるのかも知れず、それを見るとわかるのではないかと思います。どこに住んでいたのかわかってどうだというものではないんですが。

それから、次の年、一八九五年版になりますと、遺稿集にあるように永田町に移っています。ディレクトリが誤植なく打ってあればの話ですが、これを見ますと、東京の麹町区永田町一丁目七番地ということになっております。東京のこの時代の郵便地図などを見れば、この番地は特定できるかと思いますが、あまり東京のことは詳しくないものですから、ただ番地がここだよというようにただご紹介させていただきます。

以上のとおり遺稿集に関連して、これだったらこういう形で調べられるかなというようなことの一端を一例でございませけれどもお話ししたわけでございます。これ以外にもいろいろなことをもう少し、日本でのバルトンさんの足跡みたいなものはまだいろいろ調べることもあるのかなと思います。

もう一つ、前回もお話が出たかと思えますけれども、日本写真界でのバルトンさんの足跡ということがございます。これは写真の世界でどの程度調べられているかよくわかりませんが、私も丹念には見ていないですが、先ほど言いましたジャパンウィークリーメールにはしばしばこの会合の様子が報告されています。ジャパンウィークリーメールを繰っていくとバルトンさんが、日本写真界において、確かジャパンフォトグラフィアソサエティといったかフォトグラフィックソサエティといましたか、こういうことをなしたのかということがそれなりにわかるのではないかということがございます。どなたか関心があれば、そういう横浜で出された英字新聞の方

が恐らく日本の新聞より多少詳しく報道されているのではないかという気が致します。そういう面ではまだ多少調べられるかなということを思っております。

最後にもう一つ、これは恐らく、いろいろ稲場さんもお調査なされたんだと思いますけれども、台湾での足跡というものがどれくらいわかるかというようなことがバルトン研究の課題としてあろうかと思えます。たまたま、先週、私の大学院の後輩で台湾から来ているホワン（黄俊銘）さんという方がいらっしゃいまして、今日来るよと言っていたんですが、その方と先週たまたま日本に来ていたときにお会いしました。バルトン忌があるというような話は大変興味を持っておられますし、また前々から興味を持っていろいろ調べておられます。稲場さんとも水道産業新聞か何かで座談会をされたという話をしておられました。

その方と雑談していましたら、「バルトンが台北の計画をやった計画図が見つかりましたよ。」と言

っておられました。これ以上は研究者のプライオリティにかかわるから聞きませんでした。一度、何かの機会にホワンさんに台湾でのバルトンの調査結果みたいなことのお話を聞けばいいかと思えます。

また台湾での足跡という、具体的な意味で、バルトンがどういう図を残して、どういうことをやったのかということの資料を含めていくつか出てくるんじゃないかというような気がしております。

取りとめのない話をさせていただきまして、不勉強で思いつきみたいなもの、あるいはいろいろ差し障りのあるような話も含めてしまいましたけれども、取りあえず私の話はこれで終わらせていただきます。（拍手）

